



会員へのメッセージ

はじめに

「会員へのメッセージ」は、拳道学会員がより深く拳道学を理解するための手助けをするためのページです。もちろん、会員以外の方がご覧になっても構いません。会員以外の方が拳道学とはどのようなものなのかを知る手助けとなるとと思います。

拳道学のもっとも重要な部分は、理論面にあります。このことを理解しないと拳道学を理解できません。しかし、これを理解することはそれほど簡単ではありません。「会員へのメッセージ」では、拳道学を少しでも深く理解するための手助けとなる事柄を掲載しております。しかし、内容的には決して簡単ではないと思います。会員のみなさんに考えていただくために、あえて少し難しくしていますので、そのつもりで読んでください。

現在、第5回まで掲載されております。基本的には第1回から順に読むことを前提にしておりますが、内容は各回で完結していますので、どの順番で読んでも問題はありません。

第一回 拳道学を学ぶ人へ	拳道学を学ぶ上で知っておいたほうが良いことを説明します。
第二回 なぜ”新しい文化”が必要か	拳道学がなぜ新しい文化を創造しようとしているかを説明します。
第三回 拳道学の教育	拳道学がどのような教育を行おうとしているかを説明します。
第四回 学ぶ姿勢	拳道学をどのように学べばよいかを説明します。
第五回 空手と拳道学	空手と拳道学の間を説明します。



第1回：拳道学を学ぶ人へ

拳道学は、技術だけを行う「空手・拳」ではありません。また、沖縄・中国で伝えられてきた伝統的な空手・拳を単に伝承するだけのものでもありません。拳道学を学ぶ上で、「拳道学とは何か」を理解しなければ、拳道学の最も重要な部分を学ぶことはできません。ここでは、拳道学をこれから学ぼうとする人、すでに学んでいる人が、拳道学を理解するために、どのような立場に立って学べばよいかを述べます。

文化としての空手

拳道学を理解するには、まずはじめに”格闘技術としての空手・拳の考えから抜け出す”必要があります。そして、”文化であり、学問である”という視点から考えることが大切です。世の中では「空手とは格闘技術だ！！」という認識が広く普及しております。確かにそのような一面はあります。しかしながら、空手が約380年前から中国の拳の技術が少しずつ琉球王国に伝えられ、中国と琉球王国との関係の中で培われてきたこと、拳が中国において非常に長い年月の間に「医」や「舞」と関係し紆余曲折しながら変化してきたこと、さらに空手・拳ともにそれぞれの時代の社会情勢や人々の考え方から大きな影響を受けてきたことを考えれば、「単なる技術」と考えるよりも、むしろ「歴史の一部」であり、人間の長い年月の営みの中で作られてきた「文化の一つ」とであると考えるほうが適切です（「空手史のページ」参照）。まずは、このような視点に立って「空手・拳」を「文化」として眺めてみてください。

では、空手・拳をどのような「文化」として考えるのが良いのでしょうか？現代社会には、色々な文化があります。古い時代に作られた技術・技能にかかわる文化には、「長い年月で形作られた技能の伝承を主たる目的とした文化」があります。例えば、「茶道」・「華道」などがこの部類に入ります。勿論、このような文化でも、過去に作られた技術・技能を一切変化させずに伝承することが大切とするものや、伝承された技術・技能を洗練させながら伝承することが大切とするものなど、その考え方の違いはありますが、「空手」をこのような文化の一つとして捉えることは比較的容易ではないでしょうか。しかし、拳道学では、このような「伝承を主たる目的とした文化」とも異なる観点から空手・拳という文化を考えます。ここで、「さらなる発想の転換」が必要になります。

そもそも、「文化」とは何でしょうか？小学館「国語大辞典」によると、

- 1．権力や刑罰を用いなくて導き教えること。文徳により教化すること。
- 2．世の中が明け進んで、生活内容が高まること。文明開化。
- 3．自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによって作り出さ



れ、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。

とあります。これによれば文化とは、“教育”であり、“新しい価値を生み出していくもの”です。拳道学ではまさにこの視点から空手・拳を考えます。さらに、文化とは「学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによって作り出されるもの」とあります。拳道学では、この中から“学問”を選択しています。これは、世の中を進歩させてきた最も大きなものが「学問」であり、今後もそれはかわらないだろうと考えられるからです。つまり、拳道学は、“教育であり、学問によって作られ、新しい価値を生み出していく文化”として空手・拳を考えます。これは、今までの空手・拳の考え方にはないものです。したがって、拳道学は、“新しい文化の創造”を行っています。

拳道学を学ぶには

拳道学を学ぶ上で大切なことは、“自らがこの立場に立って学んでいくこと”です。拳道学が目指しているものを理解しないで、拳道学を学ぼうとしても、「葉」ばかりを追い求め、「木」全体、さらには、「森」全体を見ることはできません。しかし、ここまでの話で、「難しいことはよくわからないけど、なんとなく自分が思い抱いていた空手とは違うんだ」という人もいると思います。むしろ、そのような人の方が多いかもしれません。安心してください。このページで学んでほしい最も大切なことは、“自分の空手に対する固定観念を捨て去ること”です。まずは、“自分が知らないということを知る”ことから始めましょう。拳道学は壮大な構想を描いて創設された学問であり文化です。なかなか全体を把握できないのは当然であり、恥ずかしいことではありません。自分がそのような位置にいることを認識することからすべてが始まります。すでに拳道学を学んで久しい人も、再度このような立場で見直してみてください。



第2回:なぜ”新しい文化”が必要か

第1回で拳道学が”新しい文化の創造”を行っていると言いました。新しい文化を創造することはたいへんなことです。創り出すものが高度であればあるほど、たいへんな労力がかかり、さらには多くの人からはなかなか理解されません。では、なぜそのようなたいへんなことを行おうとしているのか？ここでは、そのことに関して述べます。

現代社会の問題

現在の社会は、100年前と比べれば明らかに進歩しています。特にこれは先進国においてはたいへん顕著に見られます。しかしながら、多くの様々な問題があることも周知の通りです。ここで一つ例をとって考えてみましょう。発展途上国の中には、内戦・紛争が絶えず、大変貧しい国が多くあります。実際、貧困の原因の最も大きなものは、干ばつなどの気候状況によるものではなく、内戦・紛争であると言われています。では、なぜ内戦や紛争が終わらないのでしょうか？もちろん、様々な微妙な政治的要因が絡み合っていることは誰もが知っていることでしょう。しかし、最も大きな要因は、その戦争を起こしている集団の指導的立場にある人々にあります。また、そのような指導者に何も考えずに、むしろ、より過激に反応しながらついていくたくさんの人々にあります。紛争がおきている国でも、実は紛争を止め、平和を願う人々が多く存在します。しかし、武器を持つ多くの人々を率いている戦争の指導者たちは、自分の立場の維持の目的で戦争を続けます。人間とは不思議なもので、当初は理想をかかげて活動をした人が、多くの人々の指導者となると、自分の立場を維持することを目的とした活動に転じてしまうことがあります。実際、このような指導者は過去においてたくさんいました。現在でもいるように思われます。

同様のことは、もっと身近なところにもあります。例えば、日本のバブル経済崩壊後の不良債権問題も、企業の経営者や社員の構造などに同様の構図があります。ここでは詳細に述べませんので、皆さんで考えてみてください。

一方で、社会を良い方向に導いた人もたくさん存在します。100年前と比べ現代社会が進歩していることがその証です。当時の問題点を指摘し、新しい考えや物を示し、様々な困難を乗り越えてそれを実現し、広め、最終的には社会を変革した人々が存在したことによります。政治家や大企業の経営者のような現在の社会に直接大きな影響を与える人は、その「力」の使い方を誤らなければ、社会を良い方向に導くことができます。しかし、社会を良い方向に変える人は、このような人だけではありません。新しい「もの」を作り出す人や既存の「もの」を発展させる人も社会をより良い方向へと進めていきます。

教育としての文化



それでは、このようなリーダーを育成するには何が必要でしょうか？これは”教育”です。教育の場と言えば、一般的には”学校”になります。確かに学校の役割は重要であり、絶対に必要なものです。しかし、社会のリーダーの育成を考えると、学校だけでは不十分です。拳道学では、”文化による教化”が大切であると考えます。第1回で、文化は教育であることを述べました。文化を通じた教育は、学校のようなカリキュラムに則ったシステムの教育とは異なる効果があります。ある文化の中で長い時間活動をする、自然とその文化の考え方から影響を受け、色々なことを学び、身につけることができます。例えば、日本で育った日本人は、システムの教育を受けてはいませんが、良くも悪くも日本の文化・日本的な考え方が身につけており、たとえ日本を離れて久しい人でも一生忘れることはないでしょう。また、身についたものは、学校での教育で身についたものとは異なりますが、しかし、大きなものです。つまり、文化による教育は、学校とは異なる方法の教育として大きな位置を占めるのです。

拳道学の目的

拳道学では、このような文化の教育としての役割に着目し、”拳道学の文化を通じて、社会を良い方向に導く人を育成する”ことを目指します。社会を良い方向へ導く人は、その分野での専門的な知識は勿論持っていますが、それだけではなく、ものの見方や考え方など学校の教育で学ぶものとは異なる面で優れた能力を持っています。さらに、人とのふれあいの大切さ楽しさを知り、思いやりも持ち合わせています。拳道学では、このような面の教育には、文化による教育が適切であると考えています。そのために、”文化による教育”を目指すのです。そして、このような人を輩出していくことで、”世界の人々が和の精神を持って、安全で安心して生活できる平和な社会の実現”を目指しています。換言すれば、”人間としてあるべき姿を学び、悟ろうとする文化”です。このような目的をはっきりと掲げた文化は、過去から現在にいたる空手・拳の世界にはまったくありません。さらに世界の色々な文化を見ても、ほとんど見当たらないようです。したがって、拳道学は”新しい文化の創造”を行っているということになるのです。

では、拳道学ではどのような教育を行うのでしょうか？これは第3回の議題としましょう。



第3回: 拳道学の教育

第2回で新しい文化の必要性とどのような文化が必要かについて述べました。文化は教育の場であり、拳道学ではそれを通して社会をより良い方向に発展させる人を育成しようとしています。そのため、拳道学は、技術だけを指導する空手とは根本的に異なり、指導方法もまったく異なります。したがって、拳道学を学ぶためには、拳道学がどのような教育を行っているかを知っておくことが大切になります。今回は、拳道学の教育について述べます。

教育の目的

これからの社会を良い方向に導いていく人に要求されることは、広い視野と深い見識、真実を見抜く能力、柔軟かつ論理的な思考能力を持ち、常に進歩しようとする心構えで、将来を見据えながら、新しいものを創造していく力を持つことです。さらに、平和を尊び、他人のことを思いやる心を持ち、人とのふれあいの大切さと楽しさを知ることです。このような人は単なる理想上の人であると思うかもしれませんが、世の人に役立つ大きなことを成し遂げた人は、多かれ少なかれこのような要素を持ち合わせています。

拳道学ではこのような人をどのように育成しようとしているのでしょうか。このような人格・能力は、知識だけでは形成されません。“知識と思考と体験”が必要となります。拳道学では、“長期間に渡り、会員同士が互いに協力しながら、体験を通し、学問を追及していく”ことで、このような人を育成できると考えています。拳道学のすべての練習・指導は、この目的を達成するために行われています。一例に拳道学の試合を考えてみましょう。拳道学の試合は、安全防具を着用し、安全性を十二分に確保した上で行われるもので、拳道学の指導ではたいへん重要な位置をしめています。

教育の一例: 試合

技術的観点から

拳道学の試合は勝敗を決める目的で行われるものではなく、直接的な目的としては、格闘技術の研究と試合を行う者同士の技術向上を目的としています。技は実際の場面で使用できる技でなければ意味はありません。また、実際の場面は状況が様々であり、理想状況とは大きく異なります。真の技とは刻一刻と変化する状況下でも効果のある技です。このような技を追求するには、実際の場面での問題点を洗い出し、兵法理論に則りながら、何度も考え直し、改良に改良を重ねていかなければなりません。

また、現代は色々な分野の学問が発展しています。格闘技術の技を考える場合でも、兵



法理論からの視点だけでなく、身体に害を及ぼさないかという保健面からの視点、相手にどのような感情を与えるかという心理面からの視点、倫理的に認められるかどうかという倫理面からの視点など、広い範囲からの検証が必要になります。これらを検証するための実験の場として試合があります。この追求には終わりはありません。そのため、学問として研究していくことが必要となります。このような活動を継続的に繰り返し行っていくと、”物の見方・考え方・問題発見能力・問題解決能力・創造力などを体験を通して身に付けていく”ことができます。

理論的観点から

試合にはかならず相手がいます。技の研究と技術向上という目的で試合を行うには、互いに安心して試合を行う必要があります。また、相手との話し合いも必要です。ここに、平和を尊び、他人のことを思いやる心を持ち、人とのふれあいの大切さと楽しさを知る人を育成する要素があります。格闘技術では相手とのぶつかり合いと打ち合いが要求されます。このような状況で安心して試合を行うには、”相手を信頼すること、相手に信頼されること”が必要不可欠です。拳道学の試合は闘いではありません。研究するための実験の場です。これは相手との信頼関係を築いて成立するものです。このような信頼関係を築くには、”相手を尊重し、思いやる心を持つと共に、それを実践”しなければなりません。競争主義の現代社会では、「勝つ」ことばかり取り上げられます。しかし、本当に必要なことは「克つ」ことです。「克つ」ことは、頭では理解していても、なかなか実践できません。拳道学では、”試合という実体験を通して「克つ」ことを体得”していきます。

まとめ

ここでは試合を例にして説明しましたが、拳道学においては、試合は重要ではありませんが、すべてではありません。拳道学の練習では、基本から技の研究など様々なことを行っていきます。これらには、「考えること」、「体験すること」、「話し合うこと」が必要となります。また、拳道学を学ぶ会員には、様々な人がおります。その中には、ある分野で非常に高い専門性を持つ人もおります。そのような人とのコミュニケーションも大切な要素です。拳道学を学ぶ場は、このような環境を提供する役割も持っています。拳道学では、これからの社会を良い方向へと導いていく人を育成するために、それに必要な人格・能力を学ぶための環境を提供します。会員は、そのような環境の中で長期間に渡り拳道学を学びながら、体験を通して成長していきます。拳道学の指導者は、そのような環境を形作るとともに、個々の会員の個性を考慮し、良い点を誉めることを基本としながら、適宜助言を行い、会員自らが成長していくことを助けるように指導しています。



第4回：学ぶ姿勢

第3回では、拳道学の教育と指導の方針について述べました。拳道学の指導は、手取り足取り教えるのではなく、会員自らが成長していくような指導を行います。この指導では、会員自ら積極的に学ぼうとすることが大切になります。今回はどのように学んでいけばよいかに関して述べます。

頭の切り替え

拳道学を学ぶ上で最も最初に意識すべきことは、「頭の切り替え」です。拳道学の技術は格闘技術を扱っているため、従来までの空手や拳と同じように見えてしまうかもしれません。特に、空手や拳に興味のある人は、テレビや雑誌などで扱われている空手や拳の情報が頭にあります。また、そのような情報をもたない人も、スポーツとして捉えてしまう場合があります。しかし、そのような視点から拳道学を見てしまうと拳道学をまったく理解できなくなります。まずは、そのような視点を一切捨て去り、まったく未知のものを学ぼうとしているというように頭を切り替えることが必要です。しかし、これを行うには努力が必要です。現代社会では、色々な空手や拳の情報が満ち溢れており、テレビや雑誌などで大きく取り上げられているものも少なくありません。このような情報に惑わされてしまうと拳道学を理解できません。マスコミで大きく取り上げられるものが良いものとは限りません。テレビでは視聴率が高ければ放映され、雑誌では売上が高ければ販売されます。また、テレビに出ている人や雑誌で取り上げられる人、本を著述する人、有名な人が必ずしも正しいとは限りません。テレビには人気があれば出演しますし、雑誌は有名な人を取り上げます。また、本は原稿さえ書けば出版可能です。大切なことは内容です。冷静に内容で考えれば、惑わされることはなくなります。頭の切り替えには時間がかかりますが、これは拳道学を学びながら徐々に行っていけばよいでしょう。

理論の重要性

拳道学の練習では技術の体得を行っているように思えるかもしれませんが、技術は拳道学の一部でしかありません。拳道学の本質は理論面にあります。拳道学を学ぶことは、理論を学ぶことと言っても過言ではありません。それでは、なぜ技術の指導を行うのでしょうか。それは、拳道学の理論学習では、体験を通じた学習を重視しているためです。拳道学では、拳道学で伝えようとしていることを、頭でだけ理解してもらうのではなく、実践できるようになってもらうことを目標にしております。そのために、体験学習を重視しているのです。拳道学を学ぶには、そのことを理解しておくことが必要です。



学び方

次に学び方ですが、前回述べたように、拳道学の指導は手取り足取り指導するのではなく、会員自らが学んでいくような指導を行います。つまり、会員が自ら積極的に学ぶ必要があるのです。現在の学校教育は、教師があらゆる準備を行い、課題を生徒に与え、生徒はそれを解決していくという「受動的」な教育が主体です。しかし、拳道学ではこのような指導は行いません。自らで進んでいく力を体得してもらうために、「能動的」に学ぶことを要求します。拳道学の指導者は、会員のレベルに合わせたヒントを適宜出していきます。そのヒントを会員自らが拾い上げることが大切です。

それでは「能動的」に学ぶにはどうすればよいのでしょうか。これは意識の問題ですので、残念ながらすべての人に通用する万能的な答えを私自身持ち合わせておりません。そこで、私自身どのような意識を持って学んでいるかを、少々強引ではありますが、3つにまとめて紹介します。

その1．教えてもらうのではなく、自分が学び取ること

私を含め多くの人が「受動的」な教育の中で育ってきたと思います。そのため、自分で気づかずに「教えてもらう」という姿勢になってしまいます。そのようなことに陥らないように、常に「できるだけ多くのことを自らが学び取る」ということを意識しています。これは、技術だけではなくあります。例えば、私は幸運にも大西先生の講義を聞く機会を与えられておりますが、大西先生は講義の中で様々なことを話されます。その中には様々なヒントが隠されています。それらのヒントを自分の頭の中で他のことと関連づけながら聞くことで、今まで気づかなかった点を学び取ることができます。また、学び取る機会は講義や指導の時だけではなくありません。自分の経験・体験の中には様々なものが隠されています。これは成功事例・失敗事例を問いません。それらから学び取ることは、講義・指導同様に貴重な機会です。

その2．常に考えること

常に考えることは、「能動的」に学ぶには必要不可欠です。今までに学んだことを考えながら整理し、さらに分からない点を見つけ出し、次の機会でその疑問点を解くというサイクルにより、たいへん効率よく学ぶことができます。しかし、頭に浮かんだ疑問点の中には、簡単に解けないものもあります。実は、それこそが貴重なものです。そのような問題は研究テーマになります。また、ちょっとしたことを見落とさないようにすることも大切です。最初はたいしたことではないと思われるものの中にも、そこから本質的なことにつながることもあります。それを見抜くには様々な知識や考え方を経験を通して体得する必要があります。その能力を体得するために拳道学があるのです。

その3．長期的に考えること

拳道学で学ぶことは、短期間で身につくものではありません。なぜならば、頭で理解するだけでなく、実践できるように体得する必要があるためです。そのためには、経験がど



うしても必要になります。焦っても無駄であり、むしろ焦るとあらぬ方向へ進んでしまう恐れがあると考えています。私は、経験を積みながら、焦らずに、しかし、着実に進んでいく意識が大切であると考えています。

まとめ

今回は、拳道学を学ぶための姿勢に関して述べました。これは意識の問題なので、抽象的な話になってしまいましたが、人間である以上、何事を行うにも「意識」が大切であると思います。拳道学を学び始めたばかりの人も、もう長い間学んでいる人も、今一度、自分自身の「学ぶ姿勢」を考え直してみることも良いことだと思います。



第5回：空手と拳道学

第5回は伝統的な空手と拳道学との関係について考えてみましょう。ここでいう「伝統的な空手」とは、現在一般に広く普及している「新空手」ではなく、かつて琉球王国に伝えられていた空手であり、糸洲安恒先生・東恩納寛量先生の流れを汲む空手のことです。拳道学はこの流れを汲んだ空手を原点としています。しかし、みなさんは拳道学を学んでいると伝統的な空手と大きく異なる部分があると感じているのではないのでしょうか。今回は、どこが違うのか、どうしてこのようになっているのか、ということについて考えてみましょう。

空手の伝統

空手の技術は、およそ350年以上前から明治初期までにかけて中国から少しずつ伝えられ、それが琉球王国の王室関係者・政府高官を中心に秘密に伝えられてきたものです。このような人々は厳しい登用試験である「科擧」に合格した人です。その中でも人格的に優れた文武兼備の人にだけ技術を伝えてきました。これは明治期に団体指導を行うまで守られてきた伝統です。この点はたいへん重要な点です。伝統的な空手は高い教養を持つ人格者に行われてきたものなのです。

一方、その技術は現代の知識レベルから考えれば多くの問題があります。いくつかの奥義があるにせよ、空手の技術は「型」がすべてです。しかし、型にある技術は現代の科学的思考方法から考えれば実際の格闘技術としては合理的であるとは言えません。このような技術となってしまった背景は空手史に詳しくありますが、空手の源流である拳がすでに套路形式（型形式）が中心であったこと、当時の琉球王国から見れば中国はすべてにおいて先進国であったこと、当時は科学的思考方法など存在しなかったこと、などを考慮すればやむをえなかったかもしれません。

継承・保存・進化

さて、このような空手を現代社会で行うことを考えると、そのままでは単に古臭いものになってしまいます。そもそも100年以上も前の技術を何も変化させずに行うということは、時代遅れのものを単に行っているだけになってしまいます。伝統技術の保存を「何も変化させずに継承することが最善である」とする考えもあるようですが、拳道学では真によい部分は伝統として引継ぎ、保存すべきものは保存し、時代遅れとなるものは時代の先を進むように進化させる考え方をとります。真に優れた伝統技術・技能を伝承している人々はおおよそこのような考え方を持っているようです。それでは、伝統的な空手の、何



を真に良いものとして引継ぎ、何を保存し、何を進化させているのでしょうか。

伝統の継承

伝統的な空手の良い部分を見つけるには高い教養を持つ人格者に行われてきたという点から考えると見えてきます。「武術を学ぶと自分に自身ができる」とよく言われますが、私を含め多くの人があるように感じているようです。当時空手を学んでいた人もそのように感じたのではないのでしょうか。だとすると、当時の琉球王国を牽引していた人の人格形成に何らかの良い影響を与えていたと考えられます。拳道学では、この考え方を単に引継ぐだけでなく、より発展させて引継ぎます。拳道学は、かつて琉球王国の社会を牽引していた高い教養を持つ人格者にだけに行われたという伝統をより積極的に引き継ぎ、このような人を育成するための空手として発展させます。

保存

空手は文化です。したがって、本当に空手という文化を知るにはその形成過程を知らなければなりません。しかし、残念ながら、その形成過程に関する歴史的資料はほとんどありません。このような状況で、残っている貴重な資料の一つとして「型」があります。先にも述べましたが、空手は「型」の伝承という形で伝えられてきました。つまり、「型」は空手の過去を知る貴重な歴史的資料なのです。このような歴史的資料は本来の形を変化させて残しても意味はありません。拳道学では糸洲安恒・東恩納寛量が形成した「型」やそれらよりも古い「型」を変化させずに保存します。さらに、空手の奥義、師が弟子にどのように指導したか、どのような鍛錬方法があったかなどの保存も行います。

進化

拳道学の技術で伝統的な空手との違いを見つけることは難しいことではないと思います。伝統的な空手の「型」にある技と拳道学の実技で行っている基本や試合は大きく異なることは一目瞭然でしょう。そもそも伝統的な空手には防具や試合は存在しませんが、拳道学では防具を着用した試合を行います。拳道学の技は防具を用いた試合により科学的な視点にたってその有効性を検証したものです。これはあきらかに大きく進化した部分であると言えます。

しかし、もっと大きな点での進化があります。かつては空手は格闘技術の一つとしてしか考えられていませんでした。これに対し、拳道学では明確に一つの文化として捉えています。さらに、現代の社会をリードする人の育成を助けるための有意義な文化になるべく、様々な学問の知識を借りて学問として新たに体系づけています。その範囲は、空手を超え、スポーツも超え、社会教育・文化としてあるべき姿を目指しています。もちろんまだまだ完成されたものではありません。むしろ学問であるが故に完成するという事はないでしょう。この点こそが本質的に進化した部分です。伝統的な空手は拳のひとつにしかすぎませんが、拳道学は文化として捉え、さらに、それを今後の社会にあるべき新しい文化として進化・発展させたものです。



まとめ

拳道学を知る一つの方法として今回は拳道学が伝統的な空手のどこを継承し、どこを保存し、どこを進化させたかについて書いてみました。技術的な部分は目に見えるためわかりやすく、そのために拳道学の本質に目が届かなくなることがあるかもしれません。しかし、私の経験から考えると、物事の本質は目に見えないところにあるようです。優れた人は目に見えないところにある本質を見抜く能力を持っています。みなさんも目に見える部分だけでなく、その奥底に何があるかを考えてみると、新たに発見することがあると思います。ぜひ挑戦してみてください。

空手の歴史、拳道学の形成史、拳道学が目指す文化に関してより詳しく知りたい方は空手史をみてください。